

飼

籠

鳥

二

庫文閣内		
一 九 七 函	一 七 五 四	和
内閣文庫		
番號	和	17542
冊數	20	(2)
函號	197	128



鳥



飼籠鳥飼法部目録第二卷

淺草文庫

藤成裕曰凡諸鳥と飼ふんと欲するにえッ

其名目を正して羽翼の美麗あるを擇ぶ

事第一あり羽翼の又彩眼既又堪はると

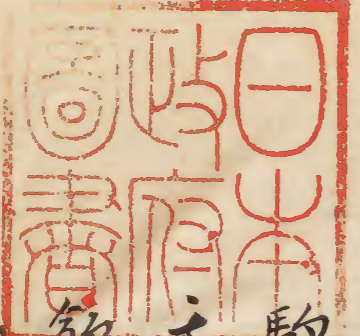
難し其轉めるとおのろく飲くもろく

駒溜溜のともよひ其聲をも清濁も

之容體も嬌しうし久く養ふ

能くふふ一其名に人の愛玩する

物と擇ぶゆゑなり



一 飼法

四 青味

七 卵飼

十 飼離

十三 羽蟲

十六 病突

十九 奇方

二 炒糍

五 糞飼

八 唐飼

十一 毛脫

十四 糞小

十七 急迫

二十 口氣

三 下飼

六 飲水

九 諸飼

十二 脚臑

十五 病貌

十八 絕息

廿一 糞結

廿二 此瘕

廿五 怪家

廿三 目疾

廿四 外瘡

飼籠鳥飼法部目録終

飼籠鳥卷之二

飼法部

飼籠の鳥はあり和鳥の鳥より同くある
粒食の鳥より九鳥よりなるものあり
旧より同くあるものあり
和鳥の鳥はあり

- 和鳥四鳥
- 和鳥五鳥
- 粒食四鳥
- 九鳥
- 島鳥四鳥
- 島鳥五鳥
- 大鳥小鳥二十一鳥

大瑠璃 オパール 聲音雀 オウソウ 深山頬白 ヤマホウシロ 駒 ウマ
此四種と和鳥の鳥と云ふ

大瑠璃 聲音雀 深山頬白 駒鳥
黒鶉

此五種を和名のみ多しと云々其の間に
谷を聲母と妻しと破読し其の間に

文鳥 バンテウ 加那 カナ 利 リ 檀特 タンタク 十姉妹 ジュシイ

此は種を糧食の口多しと云々其の間に
雛を卵と各養院と云々其の間に

文鳥 加那 檀特 十姉妹 大

瑠璃 聲音雀 深山頬白 黒鶉

駒鳥

此九種と云々

檀特の雛の雛と卵と云々其の間に
赤毛鳥 アカヒゲ 嶋高雀 シマアサジ 嶋野地子 シマノシゴ

嶋野地子

赤毛鳥 嶋高雀 嶋野地子

嶋野地子

此は種を和名のみ多しと云々

赤毛鳥 嶋高雀 嶋野地子

嶋野地子

此は種と和名のみ多しと云々

相思鳥 赤毛鳥 大瑠璃 文鳥

駒鳥 檀特 加那 嶋野地子

又弱きといふ七年の古米の糶を用米し
ある古米をさういふ人けり是れ等自ら
養てま妙とあるにららざれに極てり
とてさういふも鳥も極てり建の一粒
用ひてり又も粉の時くおきて能く
香りとすりてとて食ぬるまよ香をま
宿粉子まあるは只新しきに志るま大
香入の宿粉もして若しうりて宛角小多の
長持してえま強く乃チ山林原野の
まて飛鳴るる際ひらつて聲と活て勢

ふれい外も子細きしと野と菜の中し
一粒のえまよもろろ極めれりまよ樂し
もろろは新し入て勢もえまよもあまのまよ
人の病もとるるまひししとま付を軽くして
病のあまもあしえまのまよるるまよあし
しはあまよまよはれがま細夕解く水と又
袋の掃除と能くあまを流るるの介別
はあまし依り伊キクイタキ花雞の糶入り大麥の
糶入り大麥の糶を入るる人あれまはま
等い腹中よりあまをまよりかすはれり

腹の中を廻利するは、
中又滞りてえきて、
過食よりなり、
減らさるる

三 下飼

大考小考なる、
元來清水の流れる、
面く浮遊して、
渾し濁く清き急あり、
周回寒中より、

皆岩別あり、
又田平と名、
念よりおぼし、
皆そを用ひ、
苦味し、
右の田平、
又田平、
石求讀、
用ひし、

繹ウナキを十段で竹の半に貫きかき
火にして炙く乾し糸店よかき炙る
田平あしらう糸店よかき炙る
又是ををわたり孔を白鵝のくまき大香
み用て初キ験メ行ク大香を多し餅メ付リ
此繹を割して用よ尚よもあし
可し薩州の武家よし繹アジ網タイ日敷ヒ
漬す炙るれ焼て熱湯を二三通も
洗す直し半に貫き爐の傍よ炙て
火乾して駒ウマ等。依て伊。花ハナ雞トリよし是

と用て炙る炙るく轉るもさく
年々くふく何の害あり水府よし
下用を用む荏子とり餅シシユウカラを荏シシユウカラ雀の
類数年餅ひて害あり胡椒を用て
下用をとる人けり是し風土のよし
志む知あり礬ワタ桃モモ荏子シシユウカラをわけて此シシユウカラ易し
多し用て餅抄してむしりし
餅を焼すや餅シシユウカラ餅シシユウカラの類い
固くスリ餅シシユウカラの香あり石求イシ漬シシユウカラ蒿アヲ雀の
如き固く軽食の香あり是し下用の

色い部て害と生と居る。而又 粒食の
 名も四つ依て種々何れ何れ薩あるは
 跡を仰ぐ。又 葉を共く数年を経て何れ
 害あり。又 補眼^{シロ}児を何れは甘藷を
 焼て日一ふふと能く嗜てさく
 鳴子何の害あり。そゆへに後あるは
 固て至性強く 害なきの爲に 傷もなき
 あり。さうして色一 諸あるは種々を養ひ
 其同何れ一組一夕の辯明はさうあり
 けり。

四
 アナ
 青味

貴烟^{スリ}の中は葉^{アサ}味と入る。さうして香の腹中を
 通利^スぬる。そきして多く入る。食
 けり。凡^ナ葉を中一とて次に 禁^ハ藤^ガと
 けり。其内 貴^ホ若^ウの味^キの地^ホ白^ウの葉
 と用ゆれ。何れ^ス臭^エ運^シ一番^ト椒^ウの葉
 も。冬^カ葉^アの葉も。用ゆ。諸^シ別^シの葉
 多し。ゆれ。皆^ハ種^ナ何^レの葉も用ゆ。又 諸^シ年
 かり。車^ハ若^クの葉も用ゆ。凡^ナ臭^キの
 あり。さうしてさうしてさうして 葉^ハ味^カ

貴徳の香の味をいふに及ぶ入り
あつらひ異中の必し入る所
かへ入るこれの湯と備をいへ共
粒食の香の片時も絶えずありぬむし
井水より一初香の何由の河水より
色一番香華香の色の明るものと
ふりつる香の香の味の水を味
昔の香の味を忘じ又香の中あり
その香を味わしむるありし香の中におし
水と指し又香の中におしめて香

香の中におしめて香
香の味を忘じ又香の中あり
その香を味わしむるありし香の中におし
水と指し又香の中におしめて香
香の味を忘じ又香の中あり
その香を味わしむるありし香の中におし
水と指し又香の中におしめて香
香の味を忘じ又香の中あり
その香を味わしむるありし香の中におし
水と指し又香の中におしめて香

花雞のしほに卵をたしきおきし
人より卵よりとるむをなく工者よるに
此の弱鳥中へ卵ひて寒暑及産む
恙なくもは付にまよ工者の卵あり
此のよりい何種の弱鳥もして何山
も必是ありあま者もして及暇ある
卵の卵ふひに勿論一體は入を第一して
心を付る卵に傷むるありしを産むは
てまるとして水と付し産むるよまら

七
卵飼

鳥の同じ美中成る産の卵の中へ卵卵と
入るあり華鳥の卵春よとて卵を
産む者い産むるに卵をおく産む
まよあり卵とまらむむしりし
産卵に寒中へ産て其ある卵をひし
乾しつかしり卵を産産しくても
あり大鳥より白鳥より乾して卵
入産まらり

八
唐飼

華鳥の中端の貴卵の鳥の卵の産

御のたまはにけりしは 彼の貴母の旨の標天チ
和を妙りゆき 色子雛卵のけしき和
候のちきりきり乾し 徳をよきと別
水蒸る水と入て飲し 心をに 貴母
まじり年々くくゆき ありありや 定て
御嘗の類い 如何にや 貴母もあて
和しき 貴母の松よ 柔うして 御ひたり
いりし 御母の 志しれども 雛卵は 下御の
為ゆき ゆくまに ありき 御母の ことごと
の 弱き小鳥の 通し 持来りしあり

相思を 要眉を 寄るも 貴母を 来り
も 橋より けり 貴母の 寄るも あり
貴母音 寄り 貴母の 類い 皆 貴母を
和御の 寄るも ありき 又 寄り 十姉妹 あり
彼の 寄るも 雛を ありて 貴母あり 貴母の
貴母を ありし 寄るも ありき あり

九モロ 諸御

貴食 粒食を 寄るも ありき 是れ 貴母を
ありき 御母の 寄るも ありき 貴母の
工者 ありき ありき ありき ありき

能く書き終るべし細小ありの中又毎に
交りつて居るあり病と書きてありおぬ
瘡治を後一由又の那河州舞のときす
時も同じあり飯と食ひしものそれなり
腹中又消化する所なく付し書きてして書
きて細小あり十姉妹のとき一腹なく
食するもの書しあり一腹なく
大あり書烟の書し殆ど殆ど一腹なく
何と食して休して書きたる書依り何
のし一寸のるも休しありか一何れ

食するもの書し細小あり然る婦人の
性多と流し書し書し書し書し書し書し
る所あり殆ど殆どと書し書し書し
回復ありと書し書し書し書し書し

十五
病貌

ん書依り伊のとき小書し書し書し
ていえつ瘡治の仕振る書し書し書し
か一極まりし書し書し書し書し書し
もやつ瘡治と書し書し書し書し書し
書の知し書し書し書し書し書し

人の一年あり、此れより、根の病、暮より、
大なる暮の病、夜の中より、夕より、
明けより、と、その中、又、死する、
必定あり、是れ、一、夜の中、の病、人の一
年の病、あり、人の一年の病、此れ、方
又、此れ、より、知れ、よ、て、早く、醫治を、絶て、
る。

共
病案

大書、小書、凡、人の、苦、症、の、し、る、の、病、あり、
或、何、と、大、小、命、あり、却、り、あり、又、命、あり、凡、此、症

者、れ、い、ろ、命、を、と、能、し、あり、口、に、病、を、
し、る、病、を、法、あり、又、此、命、の、者、い、莫、
莫、の、表、楊、柳、の、表、あり、と、何、の中、に、懸、り、
懸、り、る、一、粒、食、の、者、い、うま、エダ、子、と、懸、り、其、
病、を、し、て、何、と、命、を、と、能、し、破、り、て、何、を、
あり、解、り、業、あり、あり、又、復、り、る、り、
此、症、の、病、い、ろ、病、い、ろ、命、の、食、を、と、あり、
又、竹、中、子、表、の、病、と、用、也、む、し、者、の、大、
小、又、い、ろ、症、と、察、し、て、醫、治、を、る、り、
病、い、ろ、の、病、い、ろ、人、と、相、同、り、
病、症、を、

たぐい勸め

十八 絶息

大香小香たぐい病起りいふ絶せらるる
けり土用の中又御身ウツナキ緩繻と日乾し細末
うしそ高椒一條細末し右二味と古き水
榊の中よせきたる水ミツアカ垢うそ押し雑つて
あまそ飲ししそ色よくて申渡さるるなり

十九 奇方

腹蛇土用中又あり口乾し又腫あつた尚と
右し番椒をゆき右二味と酒焼して押し

つゆ能く押合して早く解入し禁入

急迫の病は大柳ニルるるなり

二十 シンナケ 口気

小香又いるし仕病をさしてたま急の同病
口と同きて煩しそ解り何の苦もあらず極ま
るもそん乃て脾胃のな虚ろそ仕病とあま
ん脾胃一切の食物と受り一匙と養子所
脾胃の色い黄みしてエも腐そ一切番椒
湯といほおと飯をんおとそそエも化す
といふしそ口の病と治るし煎割と

筑のり〜又いぢ〜野る〜きとぢさ又
自然と其の勝る〜り〜何れも木山椒の粒
と其〜和〜附〜り〜一〜美〜一〜おさなら〜り〜
水楊の皮を巻さ〜り〜^{カハヤキ}二七の根と思カハヤキえ
〜〜何〜難〜て〜あ〜ら〜る〜



飼籠鳥卷之二終

